OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高麗における瓶形の様式変遷 ： 浄瓶形を中心に
Author(s)	権, 相仁
Citation	デザイン理論. 1995, 34, p. 144-145
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52946
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

高麗における瓶形の様式変遷 ── 浄瓶形を中心に ──

権　相仁／慶星大学校（釜山）

仏教が興隆した高麗時代には，非常に優れた仏教工芸品が多種多様に作られている。その中でも高麗浄瓶と呼ばれる水瓶は，構造的に複雑である。その用途に合う機能をもち，造形的にも美しく，文様の優雅さと技法の精巧さが調和した高麗浄瓶は，格調の高いものであると認められる。しかし，高麗浄瓶は環境と風俗による概念の差によって，その名称，用途などが本来の意味とは違って乱用されてきた。その大きい理由は，

(1) 高麗浄瓶に関する研究のほとんどが日本の学者の手によってなされ，かれらの観点に基づいて研究され，高麗浄瓶の概念とは異なった解釈がされてきた。
(2) 当時，「律蔵」の解釈の誤謬。
(3) 時代の変遷による思考の変化。
(4) 各国の生活環境と風俗，気候条件などによる浄瓶などがあげられる。

従って，私は高麗の成熟した仏教文化の基盤の上で完成された高麗浄瓶を，仏教工芸品と仏教の「律蔵」，出土遺物を中心に考えて比較，検討することによって次に提起する問題を通じて，高麗浄瓶に関する誤った認識を解明してゆきたいと思う。

・浄瓶の起源
・浄瓶の種類と名称の分析
・浄瓶の用途変化
・高麗浄瓶の様式変遷とその特徴

1．浄瓶とは本来，印度では僧侶たちの生活必需品の一つである水瓶として，その用途によって，浄水瓶，触瓶（澡瓶），甘露瓶などに区分して使用していた。つまり，

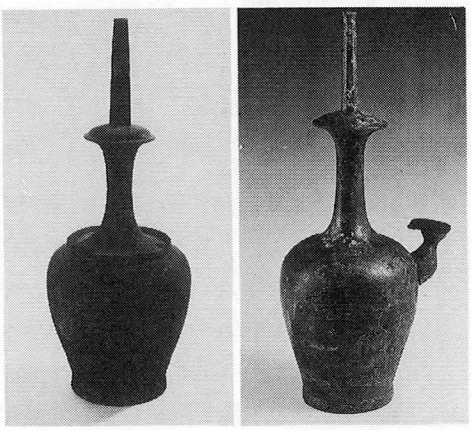
(A) 浄水瓶は飲料水や口などの洗浄用水として使用する水を蓄える容器を指し，浄瓶，浄澡罐，梵語では Kumdikā，すなわち，君持（＝軍持），君持浄瓶とも称した。
(B) 触瓶は手洗い水などを容れる水瓶として厠澡罐，澡罐，銅澡罐，銅水瓶と称した。
(C) 甘露は元来，油，塩，蜜などをいれる薬用瓶であったが，紀元後，宗教儀式用の甘露瓶として甘露水，甘露酒，甘露茶をいれる容器に変用された。「律蔵」によると，これらの形状はほとんど判別が不可能なので，単に材料によってその用途を区分して使われていた。つまり，浄瓶と甘露瓶は陶磁製で，触瓶は金属製で作る事によって浄・触を区別し，或いは瓶の胴部に注口があるものと注口の代りに穴をあけた形状で用途を区分したと思われる。このような機能性は，印度の暑い気候に起因する衛生上の面を多分に考慮した結果ではないかと解釈することができるのである。また，水瓶の中には常用水瓶，常用触瓶などの共同用と個人用の水瓶があったので，浄瓶が生活用器であることが裏付けられる。このように印度の風習と生活環境に適合して使用された水瓶が，中国，韓国，日本に伝承されてきて本来の概念とは異なる各国の実態に伴ってその概念もまた変化し，浄瓶が宗教儀式用の甘露瓶に認識されるようになっていった。故に中国と日本では浄瓶がただ儀式用の甘露瓶として頻用され，

高麗では浄瓶が佛前に浄水を供える供養具として，また觀音像，菩薩像などの持物として甘露瓶，不浄用の厠澡罐として使用された。しかし，高麗では用途において材料の区分がなく，造形性と表面意匠が優れたものと，それらが粗雑なものを区別して，浄・触に分別利用したと思われる。しかし，三国に共通する傾向としては陶製よりも多種多様に表面装飾が施せるがコストも高くつく銀製，銅製を，浄瓶用にと憧れたものと推測できるのである。以上の如く，三国の気候，環境，時代状況，出土遺物を中心に考察して見ると，この推測は立証が可能である。しかしながら，今まで高麗浄瓶に関しては，日本と同じく甘露瓶として認識され，浄瓶に関する研究の上で数多い誤謬があった。

2．高麗時代は仏教が繁栄して仏教関係の金属仏具と生活用具が多量に作り出されて，それらは驚くほど優美で精緻なものであった。その中でも浄瓶は銀・銅・鉄・青磁・白磁・土器などで作られ，その数も多く，高麗の全期間を通じて広く流行したものである。これら形姿は大きく二つの形式に分類できる。

(I)形式は現存している遺物が少く，(II)形式より造形的，技術的な面で劣っている。肩部に煙管の先のような注入口はなく，その部分に穴があけてあり，肩や頸のつけ根の部分が段状になっていて太い線をめぐらせてあるのが特徴である。この線は胴部と頸部を接合する部分に精巧な装飾を施しながら，もっと肩部の穴の形象を顕象化しているのである。更に水の流れを止めるための機能をもっている。印度では，金属で出来たこの形式は厠澡罐として使われたものであったようである。

(II)形式は高麗浄瓶の主流として現存している遺物も数多く発見されていて各部分の比例もよく調和がとれている。この器形の祖型は金属器であるが，統一新羅時代（10世紀傾）から陶製と金属器の器形が出現したし，高麗初期には，造形と技巧にすこぶる洗練された金属製浄瓶が作られている。また，これら陶製浄瓶を見ると，金属浄瓶を模倣しようとする面が強く，表面文様の意匠もほとんど同じく施されている。また，肩部には，注入口があり，そこに蓋がついていて浄水瓶としての機能性と清浄性を充分考慮した結果だと思う。印度でも陶製のこの形式が浄水瓶として使った形態である。この様に高麗では二つの形式は材料の区分がなく，浄瓶の質によって用途を分別し，高麗の全期間，高麗の人びとに愛好されたものであった。



（作品例Ⅰ，Ⅱ形式）

（Ⅰ形式）
銅製浄瓶
高麗
H：32.5，・無文
梨花女子大学校博物館

（Ⅱ形式）
青銅製入絲浄瓶
高麗，11～12世紀
H：37.5，・蒲柳水禽文
韓国，清州国立博物館